

会員・連携会員の皆様への会長メッセージ

「日本学術会議第 24 期 1 年目（平成 29 年 10 月～平成 30 年 9 月）の活動に関する評価」
における指摘事項に対する考え方について

令和元年 6 月 25 日
会長 山極 壽一

本年 4 月に開催された日本学術会議第 178 回総会では、外部評価有識者の田中優子座長から、日本学術会議第 24 期 1 年目（平成 29 年 10 月～平成 30 年 9 月）における日本学術会議の活動状況に関する評価（以下「外部評価」という。）について、御報告いただきました。外部評価は、田中座長を始めとする 6 名の外部評価有識者の皆様に、日本学術会議の活動状況について評価していただき、その内容をまとめたものです。

将来には様々な課題が山積していますが、世界観や人間観、人間の生きる意味など、現在の課題やその解決方法について社会に問うのが学術の役割です。日本学術会議は、あらゆるステークホルダーと対話しつつ、豊かな未来を築くため、より具体的な意見や提言を発出していく必要があります。そのような観点に立つと、今回いただいた外部評価の御指摘は、今後の日本学術会議の進む方向について、非常に重要な示唆を与えてくださっています。御指摘いただいた点について、私の考えと方針をお伝えします。

1. 科学者の代表組織としての役割

【指摘事項（外部評価から抜粋）】

日本学術会議は、学者や学協会にとってのブレインのような役割を担うものだと思うが、第 24 期の残された期間にブレインとして何をなすのか、ということを考えてほしい。例えば、学協会との連携の推進に向けた具体的な活動や、科学者コミュニティ内外と行う「対話」の内容面の精査等が考えられる。特に、「対話」の内容面の精査に関しては、日本学術会議としての長年の活動の積み重ねを踏まえた上での「対話」と、その時々を踏まえて時宜を得た「対話」との両方が考えられる。また、日本学術会議の、このような科学者の代表組織としてふさわしい活動については、スピードをもってタイムリーに広報していただきたい。

【指摘事項についての考え方】

日本学術会議は、我が国の科学者の内外に対する代表組織として、科学に関する重要事項を審議してその実現を図り、科学に関する研究の連絡を図ってその能率を向上させるという職務を行っております。その職務を行う上で、第 24 期では特に「対話」を重視しており、科学者コミュニティ内外とのコミュニケーションをこれまで以上に活性化させています。

具体的には、日本学術会議の活動に協力することを申し出、幹事会で承認された学協会に

は、日本学術会議協力学術研究団体として日本学術会議の活動に御協力いただいております、日本学術会議の活動に関する情報共有や、意見交換の場を設けての議論等を行っているほか、科学者委員会の下にある学協会連携分科会での検討等を通じて、学協会のさらなる活性化を図っているところです。科学者コミュニティ外についても、産業界については科学と社会委員会の下で政府・産業界連携分科会において、報道関係については同委員会の下でメディア懇談分科会において、実務者を交えた上で、対話の方法や内容を審議し精査を行っており、また、それらの場で話し合われた内容については、分科会の議事要旨の公開のほか、提言や公開シンポジウム等の形で一般の方にも公表しているところです。広報については、後述のとおり、御指摘を受け止めて改善を図っております。

第24期も残すところ1年半を切り、折り返し地点に入りました。御指摘を重く受け止め、残された期間で日本学術会議として何ができるのか、何をすべきかを念頭に置きつつ活動してまいります。

2. 多様性の確保に向けた支援

【指摘事項（外部評価から抜粋）】

活躍する若手研究者や女性研究者、特に女性研究者について、次世代の育成に資する活動を積極的に行っている方を対象とした賞を創設することにより、日本学術会議として彼らの活動を社会的に承認し、後押ししてはどうか。

また、障害者や高齢者といった分野に注目した活動を行ってはどうか。これらの分野では、工学をより活用することによって課題の解決を図ることができる可能性があり、例えば、ICTを活用した認知症の早期発見や蓄積したデータの利活用等の方策が考えられる。また、従来主流であった「治療」を目的とした研究のみならず、「科学的な予防」や「障害者や高齢者の暮らしやすい社会デザイン」、共生できる社会をめざした「認知症フレンドリー・コミュニティ」などにも焦点を当てた研究をも、推進するような提言等を発出していただきたい。科学者の代表組織である日本学術会議が、そのような社会的必要性の高い分野を後押しすることによって、それらの研究分野に注目が集まりやすくなり、若手科学者の育成にもつながるのではないかと。

【指摘事項についての考え方】

若手研究者や女性研究者自身による次世代育成は、科学者の多様性を確保して学術の進歩を図る上で、非常に重要な活動です。日本学術会議はこの重要な活動を積極的に進めています。日本学術会議自体が御指摘のような賞を新たに設けることは、これまでの歴史的経緯等からには実現が難しいと思われませんが、他機関への働きかけも含め、どのように彼らの活動を評価し、促進していくことができるのか、若手アカデミーや、各部の下に設けられた女性研究者やダイバーシティに関する分科会等においても議論していきたいと思っております。

また、御指摘のとおり、障害者や高齢者といった視点はもちろん重要です。第24期では、まずは高齢社会の重要課題である認知症に関して、病的な段階に至る前の軽度認知障害やその予備軍にまでスコープを広げ、また、工学、看護・保健学、公共政策学、経済学などの知

見も含めた総合的な検討を行うべく、課題別委員会「認知障害に関する包括的検討委員会」を設置し、審議を行っているところです。

人文・社会科学から自然科学までの研究者を擁する日本学術会議の強みを生かし、社会的必要性の高い分野について価値のある提言を発出すること等によって日本の科学技術の向上に資するよう、努めてまいります。

3. アカデミアと市民との関係

【指摘事項（外部評価から抜粋）】

日本学術会議が市民との「対話」を進める際には、未来の研究者たる子供たちの科学的興味を喚起するのみならず、国際共同主催会議等で得られた世界的課題に関する科学的知見についても取り入れることにより、市民の科学的素養を醸成することについても意識していただきたい。さらには、最新の科学的知見を市民に伝えることから一歩進め、市民が参画する研究（シチズンサイエンス）について課題や可能性を審議していただければ、シチズンサイエンスを進める一助になるのではないかと思う。

この場合、「科学」は単に科学的知識という意味ではなく、社会の動向に関する正確なデータ収集やその分析方法、言葉による論理的な思考、それらに基づいた冷静な意見交換、個々の意見の醸成などを含む。このことを前提にして市民と対話することが、人々の行動や判断の質を高めることになる。

【指摘事項についての考え方】

科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させるという日本学術会議の目的を達成するための方策の一つが、御指摘いただいた市民の科学的素養の醸成であると考えます。日本学術会議ではこれまでも、SDGs やゲノム編集技術による新たな生物の登場といった世界的な課題に関する公開シンポジウム等を開催して最先端の研究動向を市民に紹介し、また、サイエンスカフェを開催して科学に関する双方向のコミュニケーションを市民と行ってきました。また、平成30年度からは地方学術会議を新たに開催しており、東京以外の地域における市民の科学的素養の醸成と対話にもより一層力を入れているところです。

また、御指摘のシチズンサイエンスについては、市民の科学的素養を醸成するだけでなく、科学の発展にも寄与しえるものであり、また、今年度のGサイエンス学術会議の議論においても重要なテーマの一つになるなど世界的な注目を集めています。日本学術会議では、今年2月にはシチズンサイエンスについて考えるサイエンスカフェを、3月にはシチズンサイエンスを通じた地方課題解決に関するシンポジウムを開催するなど、シチズンサイエンスに関する取組を始めたところです。

日本の学術界にとって必要なことは何なのか、様々な御意見を伺いながら、学術会議として必要なことを見極め、活動していきたいと思っております。

4. これまでの活動等の検証

【指摘事項（外部評価から抜粋）】

提言等の内容について、それがどのように受け止められているのか、これまで以上に検証が必要ではないか。最近の提言等だけではなく、日本の政策に影響を与えたような提言等も対象として、提言等の長期的な影響についても検証を行ってはどうか。

また、科学技術関係予算は、短期的に成果が上がる可能性が高い分野に配分されがちであるが、将来にわたる学術全体の発展を考えた場合には、第23期3年目の外部評価書でも指摘されているとおり、学術的意義等が短期的には必ずしも明確ではないものの、長期的には学術を支えるような研究成果をもたらす可能性のある研究にも光を当てる必要がある。このような、評価に長時間を要する研究に焦点を当てた分析を、日本学術会議が行ってはどうか。なお、これまでの科学技術関係予算の使途の把握及びその効果に関する評価は、この分析を行うに当たって重要となると思われる。

【指摘事項についての考え方】

日本学術会議の提言等は、その時々時代の背景の下、科学に関する重要案件について、我が国の学術界を結集した審議の成果をお示ししたものであり、科学に関する重要案件に何が該当するかは、時代により異なるものであると考えます。過去の重要案件の中でも、「科学の向上の発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させる」という日本学術会議の目的に鑑み、現在でもなお重要であると考えられる事項については、現在でも引き続き審議やフォローアップを行っております。例えば、1950年からの重要案件である軍事的安全保障研究と科学との関わりについて、第24期では、第23期に発出した「軍事的安全保障研究に関する声明」のフォローアップを行うための分科会を科学者委員会の下に設け、アンケート調査等を行いつつ審議を進めているところです。

また、提言等のフォローアップについては、提言等発出後1年以内に、その社会的インパクトに関するインパクトレポートを作成してHPで公開することとしていますが、任意で複数回レポートを作成して公開することができるよう、様式を変更しました。これによって、これまでよりも長期にわたる提言等の影響も見ることができるようになっています。

さらに、長期的に学術を支える研究を推進するためには研究評価が重要であると考え、科学者委員会の下に研究評価分科会を設置しました。この分科会で段階的に実施している研究評価の在り方に関する調査を踏まえ、学術界の発展に資する提言等ができればと考えています。

5. 広報の更なる充実

【指摘事項（外部評価から抜粋）】

市民や外国人を含めたより多くの方々に、日本学術会議が発出する提言等を読んでもらうために、もう少し工夫ができるのではないかと。表題や要旨の日英併記や、要旨の簡略化、現状ではPDFファイルのみとなっている要旨のHTML化等が、工夫の例として考えられる。また、イベントについては、FacebookやTwitter等のSNSを活用した告知や、ホームページへの掲載の工夫によって、市民の方々の参加がより得やすくなるのではないかと。

【指摘事項についての考え方】

日本学術会議の活動は市民にあまり知られておらず、広報の充実は重要な課題であると考えています。いただいた御指摘は広報の充実に向けた具体的な改善策に関するものであり、大変ありがたく思います。

第24期では、より多くの方々に提言等を読んでいただくため、提言等に英文タイトルをつけることを必須とする規程改正をしたほか、任意で英文アブストラクトを作成するようにしています。要旨の簡略化については、科学と社会委員会において検討を開始しました。提言等の要旨のHTML化については、実行できるよう準備を進めているところです。また、御指摘を踏まえ、すべての公開シンポジウムや提言等についてホームページに掲載し、学術会議広報のTwitterで告知することとしたほか、日本学術会議のホームページからTwitterにアクセスしやすくなるよう工夫をしました。

さらに、より多くの方々が日本学術会議の提言等に興味を持ち、読んでくださるよう、第24期では、第22期及び第23期の提言等をSDGsに関連付けて日本学術会議のウェブサイトに掲載しています。このSDGsに関するページには、約1年間に27,700件の閲覧があり、日本学術会議の提言等に対する社会的関心をさらに高めることができたと考えております。このことを踏まえ、第24期の提言等についてもより多くの方々に読んでいただけるよう、発出時に任意でSDGsとの関連付けを行うことにしました。

予算の制約等があり、すべての課題を一度に解決することは困難ですが、できることから改善を行って、より多くの方に日本学術会議を知っていただけるよう努めてまいります。

第24期の活動を開始して1年半が経過しました。予算等の制約がある中、会員、連携会員の皆様には、日本学術会議の活動に積極的に取り組んでいただいていることを、大変ありがたく思います。外部評価でいただいた有識者の御指摘を踏まえ、科学者コミュニティ内外の関係者との対話をより一層充実させ、社会に貢献する日本学術会議として更なる学術の発展に貢献していく所存です。日本学術会議、ひいては日本の学術の発展のために、今後ともお力を貸していただきますようお願いいたします。